

この残酷で天災降り頻る世界を好きなように生きていく

苛性ソーダ(温)

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

元ラテラーノ人だった男が色々な場所を旅したり、後輩だった墮天使と戯れたり、原作に首を突っ込んだりと。ただ好きに生きていくだけのお話。

目次

プロフィール	
キャラ設定	1
本編	
1-1 旅人	4
1-2 昔のこと	8
1-3 再開と看病	12
1-4 堕天使達のシラクーザ観光	19
1-5 堕天使達の喧騒な夜	25
間話	
EX-1 監督官の杞憂／酒場の思い出話1	40
EX-2 バンデットという傭兵	48
チエルノボーグ編	
2-1 嵐の前の静けさ	56

プロフィール キャラ設定

【コードネーム】ケイオス

【性別】男

【戦闘経験】非公開（少なくとも3年以上）

【出身地】ラテラーノ

【誕生日】■■■■■

【種族】非公開

【身長】181cm

【鉱石病感染状況】

非感染

総合診察測定

【物理強度】優秀

【戦場機動】卓越

【生理的耐性】標準

【戦術計画】標準

【戦闘技術】卓越

【アーツ適正】優秀

個人履歴

機械とアーツ技術を複合させた技術を扱う旅人、甘い物が好きで常日頃なにかしら甘い物を懐に持っている。本人は何処の勢力に留まろうとは特に考えておらず、各地で雇われ用心棒や短期の警備員から店の雑用等をして資金を得ている。本人曰く少しの金と自分自身を守る圧倒的な力が有ればいつまでも生きていける。らしい

そんな彼が大金を稼ごうとするのは極々稀で大抵は何か大きな事を思いついた時（そうで無い場合もある。）

【開示資料1】

彼は複数の武器や装備を状況または気分によって選び戦闘を行う。

大鎌型アーツユニット【ヘルサイスⅡ】

刀身が赤色のアーツで形成される大鎌、変形機構を持ち合わせており変形すると片手銃【ヘルブラスターⅡ】となる。所謂マルチギミックサック。

【ヘルサイスⅡ】は【ヘルサイス】の改良強化型で武器全体・刀身の強度が上昇し、【ヘルブラスターⅡ】はビーム出力が上昇し高威力のビームライフルとして火力が上がっている。

【トマホーク】

ミサイルの方ではなく戦闘用の斧、普通のトマホークとは違い持ち手より上は全て刀身でありどちらかというトマホークよりはマチェットなどの剣のような見た目である。D32鋼で作られた刀身は滅多に折れたり破損する事はない。

【ピースキーパー】

超高威力なレバーアクション式ショットガン、特殊なチョークによりチャージを行う事で集弾性が格段に上昇し近距離ではなくとも高威力の弾を中距離まで飛ばす事ができる。超近距離の敵には素早く撃ち、ある程度離れた敵にはチャージ状態で撃つなどの使い分けが可能。モロに直撃をくらえばどんな人間だろうとタダでは済まないだろう。

【アーマー】

特殊な構造をしたアーマーで腰部、脚部には高出力の小型ブラスターが装備されており縦横無尽に高速で動き回る事ができる上、腕部はアーツ技術を応用した特殊なアーツユニットで持っている武器にアーツのエネルギーを流し込む事で後述する【未解放】に使用される。当然だが本人の人間強度（物理）と合わせてアーマーも頑強な造りである。

【キラードロイド】

【製造元】 未解放

【持ち主】 ケイオス

【タイプ】 ワイバーン

【種族】 機械

【解説】

大型の戦闘用マシンで巨大な翼と尻尾には鋭利な実体剣のような武器が付いており腕にはアーツを利用したエネルギー弾を打ち出す巨大な銃を装備している。ボディは非常に頑丈に作られており、ちよつとやそつとの攻撃では傷一つつけることも叶わない。巨体故に機動力は無いと思われがちだが、翼を前方向に向け全身を弾丸にして突進するなど機動力もそれなりに備えている。人工知能を搭載しており、戦闘等を繰り返し経験することにより賢く・強力に・凶悪な戦闘マシンへと成長していく。

【未解放】

【補足1】

様々な武器を扱う彼だが好き好んでよく使う武器はヘルサイスIIだそうだ。

【補足2】

キラードロイドは戦闘マシンだが、戦闘時以外は完全に荷物持ち兼移動手段であり。作られた収納機構や尻尾に増設された取り外し可能なマウントラックに武器や生活用品、テント等を装備している。

本編

1—1 旅人

とある都市のバーにて、頭に少し黒ずんだ輪っかに灰色の結晶体の羽、黒髪に片方が砕けた真っ白い角が目立つ男が一人、酒を飲んでいった。

「……………おつ、なんだ奢ってくれるのか？そいつはありがたいね。じゃ、乾杯。」

男は突然酒を奢ってきた自分と同じ年ぐらいの首からカメラやメモをぶら下げた青年となんの警戒もせず酒の入ったグラスをカチンと軽くぶつけた。

「プフウ…えっ？酒を奢ったんだから少しばかり話を聞かせてくれって？ハハハ！なんだ酒なんか奢らなくても話なんて聞かせてやるよ…で、何を聞きたいんだ？こんなしがない旅人に」

「じゃあまずなんですけど…あの外に鎮座している怪物って何かわかりますかね…？」

「怪物…？ああ、キラードロイドの事か！あいつは俺の移動手段兼ペットみたいなもんでね、一応機械だよ…え？何処で作ったかだって？すまないが言えないな…色々面倒な事になるからさ、いや俺は別に問題無いけど君の命が危ないかもしれないからね、これでも俺追われている身なんだよ…何回も追い返してるのにしつこい連中だよ、頭でっかちの公証人役場の阿保共は」

「そうやって愚痴ると男は一気に酒を流し込み、またひと息つく。

青年は先程の話に少し怯えたのか身体が震えていた、しかし青年はさらに質問を男に投げかけた。

「貴方はサンクタ族なのでしょうか…？私が知っているサンクタ族の見た目とは少し違うので気になってしまっ…」

「おお、サンクタはちよつとマイナーな種族かと思ってたがまあまあ

知られてはいるんだな、これはな…あ…うーん、流石に言つていいやつかこれ…？まあいいかこれh『グオオーン』おっと、これはまさか追つてきたな！じゃあな青年！俺といた事がバレないうちにここから離れな！運があればまた会おう！」

男はテーブルに金を置くと目に止まらぬ速さで店の外に出て行く
と怪物：キラードロイドと共に遠くへ去っていった。

く何も無い荒野く

「ん…今回ののは銃を使わない…というかクロスボウとかハルバードかあ…サンクタ族じゃないのも混じってるし。それにしてもこいつらの武器しよっぱいなあ…持つと良いの持たせりや良いのに」

『グオロロロ…』

「ああ、コラコラ別に殺さなくていいぞ！たかだか2人しかも身内だけでもこんなに煩いのにこれ以上殺ったらさらに面倒になりかねないからな」

男は倒れたラテラーノの執行人の人間をクッションのように扱い、

武器の手入れをしながらボヤいた。

背中にはレバーアクション式ショットガンの「ピースキーパー」と呼ばれるショットガンと持ち手より上が全て刃になっている戦闘用のトマホークを背負っていた。

「よし、こんぐらいかな…」

男は手に持った大鎌〔ヘルサイスⅡ〕の手入れを終えると身体に纏っていたアーマーと背中の武器を外し、キラードロイドに作った収納機能の部分に入れると再びキラードロイドに乗りながらゆつくりと荒野を歩いていった。……気絶した執行人のサンクタ人達を引きずりながら

「さて……いつらを引き渡す為には移動都市を探さねえとなあ…：辺境の地にはいなさそうだしなあ…：となるとウルサスのチエルノボーグとか龍門、シエスタとかか？」

『グオ?』

「何処が今んとこ近いかな…：ったく、毎回引き渡すの面倒なんだからもう追手ばら撒くのやめてくんねえかなあ…：ハア…：」

端末や地図を開きながらそう愚痴る。

「俺はただ自由気ままに生きたいだけなのにねえ…：」

「そろそろ奴はもう放っておくべきではないのか？」

「奴は毎回こちらの追手を生きて返してきている。奴自身にこれ以上同族への殺意がないならもう構うべきではないだろう。既に執行人の中にも奴に対してトラウマを持つ者が始めている。」

「確かに奴はイグゼキュターや他の優秀な執行人すらも退ける程の力を或いはもう既に凌駕してしまう程の力を手に入れているのかもしれない。が：流石に完全に奴を放置するのは不味い、監督官を設置し奴の動きを定期的にこちらに連絡させる。だが監督官を奴に接触させないよう注意するのだ」

「：忌々しい奴だ：奴のような存在が未来永劫現れない事を祈るしかない、では今回の会議は終了とする。」

場に居たラテラーノ公証人役場の人間達は書類を持ってその場を後にした、皆表情は不満げで持っている書類には議題に出されていた男の名が記されていた。

その名はケイオス、元サンクタ人で執行人の父と母を殺害、死体を巧妙に隠すもラテラーノにある母校卒業寸前に殺人がバレそのまま失踪、後に追放された所謂、墮天使である。

1—2 昔のこと

く龍門・スラム街く

龍門にあるスラム街の人気の無い階段で男：ケイオスと小さな少女が座りながら話をしていた。

ねーねー！お兄さんはどこからきたのー？

「俺かい？俺はねえ…龍門からめっちゃめっちゃ遠いところから来たんだよ、旅人だからね」

旅人さんのな！？じゃあこの世界のことはなんでもしってたりするんだ！

「ハハハ、なんでもは知らないな、知っている事だけだよ。良かったらだけど何か聞きたい事があるなら話そうか？ほらキャンディだ、あげよ君と会えた記念に、食べながら話そう」

いいの！？ありがとー！えーとね、じゃあお兄さんはおともだちとかいるの？わたしはね、みーちゃんとけーくんっていうともだちがいるの！

「ん、ん”ん”…友達…友達か…あれは友達って言っていていいもんなのか？どちらかというど知り合いたいなもんだよなあいつら…ああそうだ友達というか後輩みたいなのはいたな」

こうはい？

「そう、モステイマって言う女でな…たまにあいつとは授業を抜け出して駄弁ったり、街に買い食いに行つたもんだ…いやあ懐かしいね…あれから数年、あいつ今なにしてんのかねえ…」

……？ともだちなのに毎日あつてないの？

「友達だからって毎日会うわけじゃないさ、それに大体は向こうからきてたからな…こんな変人に何が好きで近づいてきてるのやら…俺にはさっぱり理解できなかったけどな、まあ面白いやつだったよ、君はちゃんとした良い友達がいるなら大事にするんだぞ？多分その方が良い」

うん！わかった！

「よし良い子だねえ…そうだ、お兄さんが今までどんなところに行つたか聞いてみたい?」

みたい!

「オーケー、まずはなーーーーー」

それから少女とは数時間程話した、ウルサスのチエルノボークの街並みだとか、シエスタの海だの事とか、ラテラーノはクソだとか、イエラグのカランド山の頂上からみた景色は最高だったとか、あとラテラーノはクソとかとか

「あとは…そうだな、東の方にあるクルビアは良い所だよ、特に辺境の方とか空気が本当に美味しいし自然を感じれる。それにくらべてカジミエーシユは少し似たような環境のくせにいろんな意味で空気は最悪だし国としてもあまり好きじゃないな、良い店も無いし…そうだな「おーいー」お?」

あ!けーくんだ!

「君の友達か…ふむ、俺もそろそろ行こうかな〜キラードロイドが近衛局とかに見つかっていないか心配だし」

えー…お兄さんいっちゃうの?けーくんにもお兄さんのおはなしきいてもらいたかったのに…

「これだけ話したんだ、君がそのけーくんに俺が話した事をザツと話せば良いんだよ。ほれ、けーくんの分のキャンデイだ、一緒に食べながら話しな!じゃ、また運が良ければ会おう!」

うん!またね!ありがとう旅人のお兄さん!

少女はケイオスに手を振るともらったキャンデイを手に友人の方へと駆けて行った。

ちなみにキラードロイドは無事に近衛局にはバレなかった模様(以外とシート被せるだけで誤魔化せるんだな…byケイオス)

「いやあく、それにしても結構話し込めたなあ…」

龍門から降り、月明かりに照らされながら草原を移動するキラードロイドの上でスラム街で出会った子供との会話に思い耽る。

『…グウ…』

「ん？どうしたキラードロイド…あ？珍しいな、こんなところに軽トラックなんて…それもテント付きの、同業者…いや、トランスポーターか？うーむ…」

キラードロイドが首を向けた方にはテント付きの軽トラックが止まっていた、しかも中の灯りはついたまんまの。何故ケイオスが疑問を感じているのかというと、灯りがついていてという事は中にいる人間は起きている筈。消し忘れという可能性もあるが移動都市の外の世界なんて食糧はともかくその他資材・資源は近くに村でも無い限り存在しないと行って過言では無いのだ。トランスポーター、旅人等に関わらず1人なら必ずそういったものは節約する筈だ…しかも起きているならキラードロイドの足音に気づかない筈がない。キラードロイドは巨体な為必ずドスンドスン、ズシンズシン音を立てて動くのだからトラックのテントから人が出たり覗く為に少し動いたりするだろうに全く動きがないのだ。

「…それとも余程警戒心が無いのか…？どうなんだ…」

そう考えを珍しく張り巡らせるが…

「ま、そんな深く考えなくても良いか。よしキラードロイド、あの中にいる奴をちよつと脅かしてやろうか！お前の顔がいきなり入ってき

たらの中の奴は驚いて警戒心とかをきちんと持つだろう！」

『グオオーン！』

普通に考えれば迷惑極まりない行為だが、ケイオスは全く気にせずキラードロイドの頭をテントに容赦無く突っ込ませた！

「……………」

が流れるのは悲鳴や驚愕の声ではなく沈黙であった。

「あれ？誰もいないのか……？よいしょっと。」

キラードロイドの頭をテントから出させた後ひよいと降りると自らの手でテントを開けた。そこで目に入ったものは—————

「……………モステイマ？」

そこには俺と同じ頭に輪っか、結晶体の羽……深い青色の髪を持つ女性—————

モステイマが少し息が荒く、苦し気な表情をして仰向けになっていた。

1—3 再開と看病

私には所謂、先輩と言えるような人がいた。互いに気が合うから旅行の話しでかなりの時間話し込んだり、あの人から授業中にも関わらず二人でこっそり抜け出して食べ歩きをしたりと、まあその人はかなり前に私の前から姿を消してしまっただけ。

あれから私はラテラーノを抜け出してペンギン急便のトランスポーターとなった。トランスポーターとして荷物を届けていくついでにあの人を見つけられるんじゃないか、って淡い期待を抱きながら。でも……

「まさかこんな事になるなんてね……」

私は一人荷台のテントに仰向けになりながらそうこぼした。別に何かに襲われたわけでもなく、トラックが故障したわけでもない。ただ風邪をひいてしまったんだ。

風邪なんて罹ってもすぐ治るだろう。全く問題はないだろう。それはそうだ、だがそれは快適な環境下である都市や村ならばの話。何もないところで一人、しかも夜、こんな移動都市でもない草原に人間などいる筈も無い。

そして……

『……………』

不気味に光る頭部と六つの丸目を持った竜の頭が私の眼前にあった。

「フフツ、まさか弱った私の前に現れたのが人や普通の生き物ではなく竜とはね……」

私は諦めて瞳を閉じる。この世界は生易しくはない。息が苦しくて意識も朦朧としてきたし。私は直ぐにでもこの竜に殺されるだろう。それでも

「……最後に一度ぐらいあの人に会いたかったかな」

———
「ただ意識が途切れる直前

「……………モステイマ？」

あの人の声が聞こえた気がした。

「しっかし久々の再会が相手の意識が無いorまあまあ酷い風邪とはなあ…そんな事あるもんなのか？」

モステイマを背中に背負いながらキラードロイドと共に歩く。ちなみにキラードロイドはトラックを銃腕でありながらその両腕で挟んで運んでいる。ちよつとかわいい。

「ある程度の処置はしたが…水とかも無限にあるわけじゃねえしなあ…こつから近い村か都市あつたっけなあ…」

いや待てよ…？そーういやこの辺に前立ち寄った村があつたな、小さいけども。

「よしキラードロイド、南に方向転換だ。いくぞ！」

『グウウ…』

あれから何十分か歩いて山の麓にある小さな村に行き着いた。

「つつても真夜中だからな…誰か起きてるかな…」

そう思つて見渡すと他の家より少しばかり大きい灯のついた家から年老いた村長らしき人物が出てきた。

「あ、あなた様は…」

「あー、覚えてるかな？確か半年前くらいにここに立ち寄った旅人な
んだけど」

「忘れるなどと…そのような事あろう筈がございません。あの日から
私も村の皆もケイオス様と神獣様の事を忘れたことは1日たりとも
ありません…」

「(神獣…?) お、おうそうか、まあそんなに感謝されるほどの事じゃ
なかったと思うけどな…そうそう、村長殿すまないが空き家か小屋は
無いか？風邪で生き倒れた知人を見つけてな、看病したいんだが…」
「こ、小屋などとんでもない！私の家の空き部屋どうぞお使いになら
れてください…確か風邪薬もありましたので…」

「至れり尽くせりだな、感謝する村長殿」

そうして俺はキラードロイドを村長宅の横に待機させ、中に入り用
意してもらった部屋のベッドにモステイマを寝かせた。

「俺も少し寝るか……」

俺は椅子に座って腕を組み瞳を閉じた。

「ん………」

「ここは…家の中…？私は確かあの竜に………っ!？」

「ケイ…オス？」

私が重い瞼を開けると、数年前の…いや少しだけ顔付きが変わった
ずっと探していたあの人…ケイオスがいた。

「んが？……おおモステイマ、起きたか…お前、あの時からだいぶ見た
目がまあまあ変わったな。」

「…久々に会ってという言葉かい？それ」

顔付きが少し変わってもこういうところは変わらないな、と私は少しホッとした。

俺はモステイマが起きたのでとりあえず体温計を渡し熱を測る。

「んー…まあ昨日より熱は下がったかねえ、しかしなんであんなところにいたんだ？旅行だとしてもお前がこんな風邪が悪化するまで放置するとは考えにくいが」

「旅行じゃないよ、今はトランスポーターなんだ」

「ほお、トランスポーターか！お前が物運びになるとはなあ、まああの仕事は国際の資格を取れば結構色々な場所飛び回るからお前に向いてたかもな。つまりお前は少し過労気味だったってわけだな？」

「ふふ、まあそんなところかな」

そう少し微笑んで言葉を返してきたモステイマを見て俺は相変わらずこいつは変わらないな…見た目以外はと思う。ラテラーノで最後に見た時は頭の輪は白く光り、羽も白かった。だが今のこいつは頭の輪は少し黒ずみ、羽も黒くなっていた。おまけにこいつはというよりサンクタ族は基本的に銃系の武器を使用するがこいつの懐にあったのは二本の杖、多分アーツユニットだろう。

基本的に銃を手に入れるには買う、敵の物を鹵獲する。しかなくがサンクタ族は守護銃と言って家族や役場から受け取る事ができる。……あのクソ共はクソみたいな銃を送ってきたけどな、しかも捨てようとしたり変えようとしたら……ああ、やめやめ思い出したくもない。

「…イ…ス？ケイオス？」

「うお!?あ、ああすまん考え事していた。ハハツちよいと昔の事を思い出してしまっただけ…」

「君がそんなに考え事をするなんて珍しいね」

「まるで人がいつも何にも考えてないみたいなき草はやめろ。」

「……………」

「…………ふっ」

「ハハッ…」

「懐かしいな、こうしてよくお前とは学校裏で喋ってたな」

「君が私を窓の外から手招きして誘って学校から抜け出した事もあつたかな」

「ああ、あつたな…何もかも懐かしいよ」

そう話に更けていると窓の外が明るくなってきた。

「モステイマ」

「…なんだい？」

ケイオスはモステイマに改めて話していた時の表情とは違い真剣な表情でありながら少し気楽な感じで言った。

「俺が居なくなつた後、ラテラーノで何があつたかは知らないし。お前が今の状態に何故なつたかはどうだって良いけどな、あまり背負い込みすぎるなよ。」

そういうとモステイマは少し驚いた表情をするが直ぐ元の表情に戻つた。

「…私は大丈夫だよ、ケイオス。今の状況も私は満足しているんだ…何より君にまた会えたからね」

「俺に？ふーむ…まあ俺から言いたいのはそのぐらいだ…ところでお前、トランスポーターなら大丈夫なのか？トラックに荷物が一つ積んであつたが…」

「ああ、それは大丈夫だよ。余裕を持って出たからね…それと、私からも気になつてる事があるんだけどいいかい？」

「ん？なんだ別になんでも良いぞ？ラテラーノを出た後の話なんて色々ありすぎるからな…特に暗いというか気にするような事はないからな、どんと来い」

「そうかい…？なら君の頭の角は元からそうだったの？片方が砕けているけど…」

「この角か？あーと、確か…そう！執行人のイグゼキュターって奴と、

ラテラーノを抜け出してから二年目くらいかなあ…に殺り合ったんだがその時避けた!と思ったら片角にショットガンの弾をもろにくらって吹っ飛んだわ。いやあ今考えると角だけで済んで良かったよ、その後は撃退したんだがな…神経が集中してるのかわからんけど一瞬意識が飛ぶぐらいは痛かったな」

「よく無事で済んだね…流石にゾツとするよ。」

「マジで痛かったからな…おかげでもう角の感覚が無くなったよ。……モステイマの角はあるのか?」

素晴らしいながらモステイマの黒い角に手を伸ばす、が。

スツ…

「ちよつ、なんで避けるんだ?」

「いや、何か触らせるとまずいかなあ、って」

「何がまずいんだよ…まあいいや(いつか触ってみるか…)」
「触らせないよ。」

「ナチュラルに心を読むな!ハア…で?他にはなんかあるか?」

「そうそう、忘れるところだったよ。私が倒れていた草原には六つの目を持った竜がいた筈なんだけど…見なかったかい?相当近くにいると思うんだけど。」

「ああ、キラードロイドの事か?」

「キラードロイド?」

「ああ、って事はお前、キラードロイドが荷台に首突っ込んだ時にはまだギリギリ意識があったのか。」

「つまりあの竜は君の物なのかい?」

「そうだが?ってか村長といいキラードロイドは神獣でも竜でもないただの戦闘もできる機械獣なんだけどなあ…いやまあワイバーンタイプだから竜ってのはあながち間違っちゃいないが…」

そう言っているとコンコンと扉が叩かれた。

「はいよ」

ガチャ

「おはようございますケイオス様…お連れの方も目が覚めたようで何よりです…」

「おう、おはよう村長殿。早速で悪いんだが米かパンは無いか？朝食を作りたいんだが…」

「朝食でしたら我々がご用意を…」

「いやいや…部屋まで貸してくれたんだ。頼む！少しは俺にも色々やらせてくれないか？」

「そこまで言うのでしたら…わかりました。お願いします。」

「ありがとう村長殿、じゃ、モステイマ。お粥を作ってくるから安静にしてな！」

そういうとケイオスは扉を閉め部屋から出て行った。

「ふう…」

モステイマはひと息付くと呟いた

「なんだろう…この気持ちは…」

話して懐かしんでいるうちに心に浮かんできた少し高揚したような感覚にモステイマは困惑した。

「でも…悪くはないかな…」

そういうとまたモステイマは瞳を閉じ、ケイオスが再び来るまでベットで一眠りするのだった。

風邪の時に感じていた息苦しさはもう既に何処かへ消えていった。

1-4 墮天使達のシラクーザ観光

あれからもう1日モステイマの看病をして俺達は村を出た。次は何処に行くか考えていたが、モステイマはシラクーザに荷物を運ぶ予定だったらしいので病み上がりという事と何処に行くかと考えていた事もあり、取り敢えずシラクーザまでは一緒に行く事にした。

「いやあくそれにしても久々だな車に乗るのは。」

「運転免許は持ってないのかい？」

「ないない、キラードロイドを手に入れるまではずっと歩きだったよ。キラードロイドに乗るのに免許は要らんしな」

ケイオスはそう言い、助手席で横で走りながら並走するキラードロイドを見ながら車から流れるラジオを聞く

「一応まだ病み上がりなんだけどね。」

「運転変わるのには構わないが恐らくこの車を廃車にしちまうぞ？それでも良いなら変わるが」

「やめておくよ、故障ならまだしもスクラップになったら流石に直せないからね」

「言うねえ……ん？いいなこの曲、誰が歌ってんだ？」

「その曲はソラっていう龍門のアイドルが歌っているんだ。私の同僚だよ」

「へえ、ソラって言うんだ……あ？同僚？この子アイドルなのにトランスポーターを副業してるのか?!」

「まあ、彼女にも色々な事情があるんだよ。私の所属してるペンギン急便って所は自由な職場だからね。」

「自由な職場ねえ……お、もうすぐ着くな。もう少し進んだら降ろしてくれ、キラードロイドを隠してくる。」

「わかったよ。」

「俺は繁華街辺りをぶらついてるからそっちの荷物が届終わったら合流しよう。じゃ後で」

そう言っただ俺はモステイマと別れた。ちなみに今のところはキラードロイドを隠して誰かに見つかった事はない。布被せているだけなのに何故なのだろうか。

くシラクラーザ・繁華街く

ケイオスは繁華街にある一角の喫茶店でコーヒーを飲みながら考えていた。

「(よくよく考えたら合流しようって言ったけどモステイマの奴普通にどっか行きそうだよな…ま、久々に会えたしアイツも仕事あるだろうしなあ。) よし、会計するか。」

そういつて席を立つと

「おや、丁度今来たんだけどもう行くのかい？」

コーヒーを片手に持ったモステイマが居た。

「なんだ、てつきりお前は別の都市に出発したかと思っていたが」

「君との約束を忘れる事は無いからね。そこまで私は堕ちてないよ」

「へっ、ラテラーノの時に俺を囮にして教師の目から逃げた事は忘れてねえぞ」

「なんのことかな。」

「コイツ…！まあ俺が誘ったんだから結局は俺が悪いのは確かなんだがな。ところで…」

「ん？」

「その包み…お前、荷物は届けなかったのか？それとも届け先の奴が不在だったのか？」

「ああ、そうなんだ。届け先の人居なくてね…また暫くしたらいつてみよ「いや、違うな」…:…?」

「お前も気付いてると思うが外に変装したマフィアがこつちを見る。今はざつと三人ぐらいか…:その荷物、推測だが外の奴らと対立してる組のだろ?違うか?」

「:君の目は誤魔化せないね。実は受け取り先のマフィアが壊滅しちゃっててね。一応契約では壊滅したら戻しに行く約束なんだけど。」

「シラクーザは部族間の争いが多いからなあ…:それでアイツらが嗅ぎつけに来たって訳か、無駄に鼻が効くねえ…:で?なんで俺を誤魔化そうとした?」

そういうと珍しくモステイマはバツの悪そうな表情を浮かべた

「それは…:あまり君を巻き込みたくなかったからかな。」

「俺を?」

「君は昔私に『縛られるのは嫌いだ、誰であろうと俺の思いを、行動を無理矢理押さえつけるような奴らは』って話したじゃないか。」

「ああ〜言ってたなそんな事。まあ確かに折角とんでもなくしつこい公証人役場から追手が消えたつてのにギヤングだのマフィアに絡まれるのはごめんだ…:が、俺の唯一無二の友人がそれに絡まれてるのを見過ごす程俺だつて墮ちちやいなさ。」

「ケイオス…:」

「まあ正直お前一人でもマフィアの相手なんて楽だろうが余計な気を使わせちまったからな。ちよつと首を突っ込まさせてくれ、いい考えがある。やってみないか?」

「で?君が選んだのはこつちの三段アイスクリームだったよね?」

「ああ、そうだ。これだよこれ！この甘さと質量！たまらないね」
「昔から君は食べる方だったけど、こんなに甘い物好きだったけ？」
「ん〜？まあ確かにあの頃はある限り甘い物を食わなかったが今じゃもう無かつたら生きてられないぐらいだぜ？実際俺は常に甘い物を忍ばせてる。それに糖分はいくら摂っても損はないからな。あーむ。」

喫茶店から離れた俺達は繁華街にあるグルメを食べ歩きをしながら移動していた。当然、マフィアの連中は後をつけてくる。

どの街もだがマフィアが昼に手を出してくる事は滅多にない、人気の多い場所では特にだ。大体は夜に揉め事が起きる。

だから取り敢えず夜までは繁華街でモステイマと食べ歩きをする事にした。

それにこつちにとつても夜が好都合だからだ。なんてたつて今日で奴らのマフィアを壊滅させるんだからな。

「それにしてもここは街の変わり具合が面白いな龍門のスラム街と活気ある近代街のギャップも良いがここは高層ビルがあるにも関わらず古風の建物も入り混ざってる。」

「そうだった街の中の違いを見るのも食べ歩きの醍醐味だね。」

「ほんとほんと…あむ。美味かった。ごちそうさん。」

モステイマの言葉に同意しつつ、残ったアイスクリームのコーンを噛み砕いて飲み込む。

「あ、ケイオス。ほっぺにアイスが付いてるよ」

「マジか、どつち？」

「左だね。」

「お、ありが…」

俺は頬にアイスが付いているのを指摘され自前のハンカチで拭おうとした。が

「あーんむつ…」

「……………は?!?!?!?!?!」

モステイマが突然頬のアイスをその青い舌で舐めとった。

「な、ちよ、おままま…!?!」

「ん、いいねこの味、丁度良い甘さかも」

「ああ、良いフレーバーだろ…じゃねえよ!?!いきなりこんな事してくるなんて狂ってんのかモステイマ!?!」

急な行動に驚く俺を見てモステイマは笑った。こ、コイツ…!人が初心な反応してる所笑いやがって…!俺だって羞恥心ぐらいあるんだぞ!と言いかけてその言葉を飲み込んだ。危ない危ない…

「フフツ、そんな驚いた君を見るのも久々だね。でも確かにちよつと私は昂ってるのかも知れないな」

「昂ってるねえ…昂る理由が分からんよ俺には…」

そう言うともステイマは真つ直ぐ俺の方を向いて言ってきた。

「いや、原因は君だけだ。」

「あの村の時といい、なんで原因が俺なんだ?確かに久々だが…」

「君があの日、私に有無を言わせず消えたからじゃ無いか」

「…:…それに関してはずまないと思っている。付き合いが長かったお前に別れ言葉だけ言って去っていったんだからな。」

「あの後、私は結構悲しんでいたんだよ?あまりに突然過ぎたし、卒業間際だったけどまだ君と居られると思っていたからね。だからあの日に君がいなくなるなんて考えてもみなかった。」

「…:…うむ、何も言い返せんな」

「まあ、あの後公証人役場の機密事項を見て何があったかは知っているけどね…:…それに…」

「それに…?」

そう聞くとモステイマは自身を嘲笑うように言った。

「あれだけ一緒に居たのに気付けなかった自分に嫌気がさしたのさ。」

「…:はっ、お前が気にする事じゃねえよ。俺が敢えて言わなかっただけだ…」

「あの時の私はそんなに頼りなかったのかな…?」

俯きながらもグツと俺の腕を握ってくるモステイマ

「そんな事は…」

そんな少し感情的になっている珍しいモステイマを前に俺は少し口淀んだ。頼りなかったわけではないが、無駄な心配はあまりかけたく無かったのだ。それにいくらモステイマとは言ってもあの環境じゃきつとどうにもならなかっただろう。まあだからこそあの結果だったわけだが。

「はあく、ああやめだ！やめやめ！折角の食べ歩きなのに黒い思い出をずっと話すんじゃない。それにお前サラツと公証人役場の俺に関する機密事項を読んだって言ったな。なら分かるだろ？俺の周りがどういう状況だったかが」

「っ…それは」

「昔は頼りにする事が出来なかったが今ならできる。今日の事も頼りにしてるんだからよ。ほら、なら次はお前がシラクーザの案内をしてくれよモステイマ。お前だってココには何度も来てるんだろ？」

「…そうだね、ちよつと私らしく無かったかもしれない。じゃあ行こうか。向こうの通りに良い屋台があるんだ。」

「そいつは良いな、是非案内してもらおうじゃないか」

こうしてモステイマとは少し微妙な…よくわからない空気になりつつも数時間喋りながらシラクーザの街を左、右と食べ歩きながら回って行くと。あつという間に日が暮れてしまった。

そして日が落ちて月が出てきた。

夜が来る。作戦の決行時だ。

1—5 墮天使達の喧騒な夜

くシラクーザ・裏路地く

「おい、あのサンクタの女と男は見失ってねえんだろな？」

「へっ、あいつらは呑気に食べ歩きしてるぜ。甘い空気だしやがっていけすかねえ。」

「目的は女の荷物だ、男の方が離れたタイミングで行くぞ」

日が落ち、月が出た夜のシラクーザの繁華街でマフィア達が所属しているグループはモステイマの持つ荷物を狙っていた。最近になり1グループのマフィアを壊滅させたこのマフィア達はそれに勢い付き、他のグループを吸収し中々の規模を持つマフィアに成長を遂げていた。そして今回狙っている物…それは荷物の中身である重要書類である。これには龍門に残っている壊滅させたマフィアの残党が送った龍門にいるマフィアの情報やそれぞれの取引先や仕入れルート等が載っていて、まさにこのマフィア達からすれば喉から手が出る程の価値がある物である。

「おい、あいつら角を曲がったぞ！」

「あつちは裏路地に続く道…ちようど良い、他の奴らにも知らせろ。袋叩きだ。」

「あ？何言ってるんだ、そしたら他のやつに手柄を取られちまうだろうがよー！」

「くだらねえ事言ってるでとつと行けバカが！」

そう言い争いをしながらモステイマとケイオスが曲がった道を後をつけていく。

「おい男の方がいねえぞ！チャンスじゃねえか!？」

マフィアの一人が見るとケイオスがモステイマの側からいなくなっていた。

「はっ！運がねえなああの女は…よしテメエら行くぞ。」

「ついでにあの女も荷物ついでにやっちまうか？」

「いやあく、あいつはそんなヤワじゃないから少なくともお前らじゃキツイんじゃないかなあ…」

「あ？なにびびって…待て？誰だ今の声」

この場にはいない筈の四人目、しかも聞き覚えのない声に困惑し、マフィアの一人が振り返ると

視界が反転していた。

「まず一人」

ゴトつと音を立てて落ちる首を尻目に残った二人を見る。

「なっ、あ、アル!？」

「テメエよくもアルを！」

ナイフを振り抜いてこちらに突進してくるマフィア

「いやいやいや…」

「あがあ…!？」

「ナイフと大鎌じゃリーチが違いすぎるでしょ、見てわからないのか？」

突進してきたマフィアの胴体は袈裟斬りにされ血と体と共に地面に叩きつけられた。

「あ、ああ…お、おい早く誰か来てくる」

「さいなら」

「あ…」

錯乱しながらも通信機を取り出した残りのマフィアは真つ二つにされ地面に斃れた。

『おい！どうした！そっちで何が…「ノックしてもしもーし？聞こえてる？通信機越しのマフィア諸君？」誰だテメエは!？」』

「これからテメエら全員、一人残らず消してやるから早く来い。じゃ」「なんだt」

そう言うケイオスは地面に携帯を投げ足で踏み潰した。

「やったのかい？」

「ああ、やった。じゃあモステイマ、手筈通りに任せたぞ。」

「もちろん、じゃあ始めようか。」

モステイマと二手に別れた後、建物の上を跳びながら、モステイマに話した作戦の内容を思い出す。

『作戦はこうだ、つても単純なもんだが…二手に別れて連中を一箇所に誘き寄せる。場所はこの繁華街の外れにあるゴミ集積所だ、モステイマは出来る限りあいつらを誘き寄せてくれ奴らの狙いはお前の荷物だからな…あえてお前を囮にする。俺はビルの上を飛び回って奴らの逸れがないか確認しながら集積所へ向かう。OK?』

『OK。それにしても病み上がりの私にまあまあ無茶させるね君も』

『キツイか?』

『冗談だよ、良いリハビリになりそう。』

『そいつは良かった。じゃあそれまでは——』

「……………よくよく考えるとアイツとこういう事するの初めてだな、雇われ用心棒とか傭兵として雇われた時には似たような事はやっていたが。」

「……………なんでこんなに気持ち上がってるんだ…?。まあ良いか」

何故か気分が高揚している事に疑問を抱きながらもそう口に出しながらケイオスは夜の街に溶け込んでいった。

…ちらほら見えたゴミ集積所に集まろうとする。マファイア達を射殺しながら。

「おい!あの女は何処だ!?!」

「見つけ次第殺してでも奪え!」

「男の方を見つけたらすぐ知らせろ!罫り殺しにしてやる!」

繁華街の一角の裏路地では大勢のマファイア達が集結してきていた。

「おい!女は郊外のゴミ集積所の方へ逃げてるらしい!とつとと追う

ぞ！」

「追い詰めて袋叩きだ！」

仲間を殺され、挑発に等しい行為を受けた。マフィア達は完全に頭に血が昇っていた。

すぐ様連絡が広まりマフィア達はゴミ集積所に向かって繁華街の様々な道を縫うように走っていた。

〈繁華街・郊外付近〉

「待ちやがれ女ア！」

「凶器を持った人に待てと言われて待つと思う？」

「その荷物だけ渡してくれりやお前だけは生きて返してやるよ。何処かに隠れてる男の方は殺すがな！」

「うーん：君達じゃケイオスは倒せないと思うけど？」

そう言うともステイマは黒い杖から青い色の炎のアーツを繰り出す。

「おい！気をつけるアーツだ！」

「あの女、サンクタのくせに銃じゃなくてアーツを使ってくるのか!？」

「全員が銃しか使わないって事は無いと思うけどね」

ちよいちよいアーツを繰り出しては後ろに後退していく、相手をしている集団の後ろを見るとさらに大勢のマフィアが追って来てるのが見えた。

「(手前の集団は30：後ろのは大体70人くらいか。逸れがいてもケイオスが処理してるだろうしこれで全員かな)」

大体のマフィア達の人数を確認するとステイマはアーツ攻撃を一度止め、走る速さを上げていく。

「(そういえば：ケイオスとこういう事をするのは初めてだ。)」

今まで食べ歩きや雑談、旅の話を一緒に何度もした事はあったが、肩を並べて戦うという事は一度もしなかったし機会すらなかった。特にモステイマにとっては誰かと肩を並べるといふ事自体が珍しい事だった。

「(どうしてこんなに胸が昂まっているんだろう。)」

本来なら全く反応しない事に反応する自分の気持ちに困惑するが

…
パキユン

と、マファイアが持つ拳銃が頬を掠め、モステイマの思考を現実に戻した。

「おっと…考えすぎるのもよくないね。」

そう呟くと黒い杖から再び炎のアーツを繰り出しながら後退していった。

〈 繁華街郊外・ゴミ集積所 〉

ゴミの山が立ち並ぶ集積所

その上からマファイア達は下にいる青い髪の

サンクタ人——モステイマを見下ろしていた。

「おい、嬢ちゃん。最終通告だ。痛い目に遭いたくなきゃとつとそ
の荷物を差し出して男の場所を吐きな。テメエが術師だろうがこれ
だけの人数に敵うわけねえってのは分かるだろ？馬鹿じゃあるまい
しよ。」

マファイアのボスと思われる男がそう言う拳銃を持っている部下
のマファイア達が一斉に銃を向ける。

「悪いけど仕事だからね、荷物は渡せない。それに私が言わなくても
ケイオスは来るよ。ほら」

モステイマがそう言つて真つ暗な空に指を刺すとケイオスが降つて来た。

「よ、っとー！あれ？モステイマの方が早かったか？思いのほかバラけてたからちよつと逸れを始末するのに時間かかっちゃったな。」

「大丈夫、私も丁度来たところさ。」

「おつ！そうなのか！それと…いいね、ぎつと100人ぐらいか？よく誘き寄せてくれた。ありがとうモステイマ」

「…ふふつ、これぐらい問題ないさ。丁度良い病み上がりの運動にもなつたしね」

二人は銃を向けられ、大量のマフィアに囲まれているにも関わらずお構いなしに会話する。

そこにマフィアのボスの怒号が響き渡った。

「テメエ…！逸れを始末しただと…!?俺のファミリーを一度じゃ飽き足らず何度も！何人も！」

「一応だが後輩の仕事の邪魔をしたんだ…仕方がないだろう？それにお前のお仲間はどこにど真面目に向かつてる奴よりも道中で小さな事で揉め事を起こしたり仲間割れしてる奴の方が多かったぞ？ファミリー、ファミリー言う割には全く纏ってないじゃないか？なあ、親玉さんよ？」

「…………ツツ!!もう良いテメエら！やっちま「ああそうだ、あと一つ言うことがあった。」あああ!？」

「足元には気をつけた方が良いぞ？」

ケイオスがそう言った瞬間、マフィア達の足元のゴミ山が盛り上がりながら崩れ始めた。

「地面が…?!」

「足元が崩れる！」

「何か出てくるぞ?!」

『オオオオ…』

瓦礫や鉄屑等のゴミ山をマフィア達事崩し、中から重低音の咆哮を轟かせながら現れたのはキラードロイドだった。

「な、なんだ!?この怪物は!？」

「ば、化け物…」

「デカ過ぎんだろ…」

突如現れたキラードロイドに戦慄するマファイア達。キラードロイドは首を動かし周囲を六つの目で確認すると腕部の巨大な銃を構えた。

「成る程ね、この場所に隠したからマファイア達をこの場所に誘導させたってことかい？」

「そういうこと…それに郊外のここならある程度は暴れられるからな。……さあキラードロイド！お前の大好きな殺戮だ、久々だろう。存分に楽しめ！」

ケイオスがそう合図をするとキラードロイドはマファイア達を狩り尽くさんと腕部からエネルギー弾を乱射し始めた。

「うわああああああああ」

「ば、化け物が！だれかたすk」

「こんな事になるなんて！俺は逃げるぞ!!」

「ボス！どうすれば!？」

エネルギー弾に身体を貫かれ倒れる者、やけっぱちに拳銃を撃ちまくるも強固な装甲を前に傷一つ付けられれず無残に撃ち抜かれる者、逃げようとして背中をあっさり撃たれる者、近づいて肉薄しようとして長い尻尾の実体剣で斬り飛ばされる者とゴミ集積所は阿鼻叫喚の処刑場へと早変わりした。

「何逃げてやがる！あの怪物を無視して男を殺せば終わりだろうが！とつとと行け！」

「ボ、ボス！危ない！」

「あ…?」

そうマファイアのボスが指示した瞬間、巨大なキラードロイドの翼が叩きつけるように振り下ろされた。

「ボスがやられた!!」

「逃げろ！」

「もうやめ…」

『グオオオオオオオオオン!!』

ボスがやられたことにより一斉に集積所の入口へ殺到したマフィア達を好機と言わんばかりに自身の翼を前に向け錐揉み回転をしながら突進し、マフィア達を一気に吹き飛ばした。

巻き込まれたマフィア達は突進されグシャグシャになった者、空中に吹き飛ばされ地面に激突した者と、一瞬にして死屍累々の光景が出来る上がった。

『グウウウ…』

キラードロイドは再び首を揺らしながら六つの目を点滅させ周囲を確認する。

『NO ENEMY』

「よし、終わったな。」

「…：塵殺とはまさにこの事だね」

モステイマが少し顔を顰めながらそう言った。

「ああ…確かにあまり良い光景とは言えないな…：配慮が足りなかった。すまん」

「いや、まあ確かに気持ちの良い光景ではないけれど私は別に不快に思ったとかそういうのじゃないんだ。ただ最初聞いた時に少し疑問に思っていたんだけど、全滅させる意味はあったのかな？」

モステイマが投げかけた疑問に俺は答えた。

「昔、一度似たようにマフィアを潰したんだがな…：その時は殺さず叩きのめした程度だったんだが、そいつらは別都市に移動してもしつこく追ってくるもんだからマフィアだのギャングだのに対して不殺を貫くのは辞めた。自分らから仕掛けてきておいて逆恨みで旅を、俺の進む道を邪魔されるなんてもうごめんだからな…」

「…：戻ろうか」

「ああ、そうだな…：つっても俺はもう一度キラードロイドを別の場所に隠してくるがな。明日にはこの町を出るが…：ここで暴れた以上明日誰か来たら面倒臭いしな…：お前は どうする？もう真夜中だが町を出るか？荷物を戻さないといかんだろうし。」

「いや、私も今日は泊まって明日町を出ることにするよ。少し疲れたし無理は良くないからね」

その事を確認し、じゃあまた明日とモステイマに背を向けて歩いていこうとすると紙を差し出された。

「……………なにこれ」

「私がここでよく使ってるホテルの場所さ、隠し終わったら来なよ。何処に泊まろうかまだ決めてなかったんだろう?」

「……………ああ、わかった。終わったら行く」

少し言いたい事もあったが俺はその提案に乗る事にして、一旦モステイマと別れた。

くシラクーザ・繁華街にある宿く

キラードロイドを新しい場所に隠し、モステイマが渡してきた紙に書いてあったホテルに着く。外見・内装共に普通のビジネスホテルといった感じだ。話は通っているようで部屋のカードキーを貰い部屋に向かった。

「入るぞ、モステイマ……といひかなんで相部屋にしたんだ?金なら後で……」

カードキーで部屋のロックを解除し、声をかけるが返事は無かった。中に入ってみると二つあるベットの内の片方にモステイマは眠っていた。

「なんだ、先に寝たのか……………じゃあ俺も寝るか。」

上着を脱ぎ、ベットに潜り瞳を閉じる。

今日は色々昼から夜まで濃かったなとか、モステイマと共闘…と
いっても背中を合わせて乱戦を戦い抜いたなどと言う派手な形では
無かったが初めてこういう事ができた。とか昼のモステイマは何故
少し感情的になっていたのかと。色々な考えを抱きながら眠りにつ
いた。

………が、眠ろうとする直前、部屋の中で物音がした。

この部屋にはモステイマと俺しかいない筈…まさかマフィアの残
党が乗り込んできた…？それともその残党が雇った人間か…？

そう考えているうちに自分が寝ているベットがキシ…と音を立て
た。

…速攻でCQCをかけて首をへし折ればモステイマは兎も角他の
部屋に聞こえるほど騒ぎにはならない筈！

「寝首を搔くなら音を…つと!？」

「わっ」

そう思いながらCQCを仕掛けようと目を開けて飛び込んできた
のは少し驚いたモステイマの顔だった。

「びっくりしたなあ」

「びっくりしたのは俺だ馬鹿！寝てたんじやないのか？何故俺のベッ
トに来る…お前のベットは向こうだぞ。」

「少し喋りたくてね、君と」

「ならなんで先に寝てたんだよ…それに喋るなら明日でもできる。も
う遅いし寝るぞ、おやすみ」

そう言つて再び布団を被り横になる。やはり今日のモステイマは
いつも…というか前はこんな感情的になるということはあまり無
かったというのに…：昼間に言っていた通り俺が原因なのか…？そ
う考えに耽けていると、突然後ろから抱きつかれた。モステイマだ。
「モステイマ…？何を「ごめん、少しこうさせていて」………わかっ

た。」

突然モステイマに抱きしめられた事に混乱したが、いつもと様子が違う声に一瞬で混乱が収まる。

しばらくして俺はモステイマに声を掛けた。

「……モステイマ、やはりお前は何かが変わっただろ。お前との思い出は俺にはラテラーノまでの記憶しかないがお前はこんなにも感情が面に出たりする人間では無かった筈だ。少なくとも俺は今日以外でお前の色々な表情を初めて見た。…昼間、確か俺が原因だと言っていたよな？なら教えてくれ。お前にとって俺が一体なんの影響を与えてしまったのかを」

俺は淡々とそうモステイマに告げた。答えてくれなきや俺はきつとこれからの夜、この事が引つかかって永遠に眠れないだろう。ただか一人の気持ちに…なんて思われるかもしれないが。俺があのかくソミたいな環境で潰れずに生きれた要因の一つとして唯一の友人であり後輩であったモステイマのおかげでもある。そんなモステイマがこうなってしまうのがどうしても気になってしまうのだ。

モステイマの表情は分からないが、ぽつぽつと言葉を零すように話し始めてくれた。

「君が別れ言葉を一方的に告げてラテラーノから消えたあの日…私の心には消えない穴が空いたんだ。最初の内はこの感情…気持ちも少し時間が経てば無くなる。そう思ってた…だけど時間が経つにつれてその心の穴は広がっていったんだ。それは周りの皆や戦友と過ごしてきてもその穴は埋まらなかった。それから私は気付いたんだ…不要だと思っていた想いが…君と過ごしてきたあの数年間がかげがえのないものだったってこと。それだけ君が私に及ぼした影響は大きいんだよ?。」

そんな言葉と同時に抱きしめる力が強くなる。

そうか…俺はモステイマに…あらゆる感情に反応に対して興味がなかったお前にそこまで言わせられる者になれていたのか…少し誇らしいというか嬉しいな。

だがそれはそれとしてまだ聞く事はある。

「…俺がお前をそこまで変えてたなんて思わなかったな。しかし…村にいた時言ったが…何故お前が俺と同じ様になったかはどうだって良いと言ったな。だがお前の今の話を聞いてどうしても聞かなければいけない事がある。……俺が原因でそうなったのか？」

「それは違うかな。こうなったのはまた別の理由さ」

「……そうか。」

それを聞いてホツとした。もし俺が原因だったらモステイマに対して申し訳ない気持ちや後悔の気持ちでいっぱいになるところだった。

「…まだまだ言いたい事はあるよ。私はその後公証人役場が目的を君の捕縛から君の殺害に変えたというのを知った時、私は全身が凍りついたような感覚に襲われたし執行人が君の殺害に失敗したと聞いた時は毎回ホツとしてた。」

「確かに最初の時は攻撃が激しくはないなと思ってはいたがアレ捕縛しようとしたのか…充分殺意マシマシだったけどな…」

俺は少しはぐらかすようにそう言った。

だがモステイマはさらに言葉を続けた。

「だからお願いだよ、ケイオス」

「私からもう離れて行かないで欲しいんだ」

そう涙声で言っただけ少し苦しくなるぐらい抱きしめる力を強くしてきた。

まるで二度と離さないと言っても言うように。

ああ、モステイマ…お前は俺の気持ちを分かっているながらも。そして自分の止めようがない気持ちを持ちながらも言ってくれたんだな。

自分の二度と離れたくないという欲、そしてその欲は即ち俺の行動や自由を阻むという事になる。

いや、モステイマなら俺が行くところについて行くこうとしてはくれ

るだろう。だがそれはモステイマの今の仲間：ペンギン急便の仲間を裏切る事になる。と言っても俺はソラという名前の子以外は知らないが他にも従業員はいる筈だ。

だから俺は…

「ありがとう、モステイマ…お前が自分の気持ちを吐露してくれた事、本当に嬉しかった。だけど答えはNOだ。」

「…君ならそういうと思ったよ。」

沈んだ声でそう零すモステイマ。

俺は言葉を続ける。

「だから…」

これはお詫び…いや俺は単にこのモステイマに対する気持ちをぶつけたかったのかも知れない。お前の心に影響を与え、そこまで想ってくれた奴に俺は見たことしかない、する事は永遠無いだろうと思っていた事をした。

「ケイオ…んむっ!？」

俺は腕を解き、身体を捻らせて向き直る。そこには少し無理に笑みを浮かべながら涙を流していたモステイマがいた。そして俺はモステイマの唇を奪った。

キスだ

目を見開き、顔が赤くなっていくモステイマ。

「っ…い…ズルいよ、ケイオス…」

「これは申し訳なかったという気持ちと昼の時の仕返しだ…それにならずと一緒にいなくなつてまたこうして無事に会えたんだ。だったらいこうしよう」

俺はモステイマに新しい…というより妥協案を示した。それは

・連絡先の交換

・月に一回は会う

の二つだ。

幸いモステイマは納得してくれた。

「俺はまだまだ旅を続ける。寿命尽きるその日までな。それにお前

だってラテラーノを出てからペンギン急便って言う仲間達？同僚達？
？ができたんだ。そいつらも大切にしていやれよ。まあ分かってると
は思うけど。」

「分かってるよ。ちなみにケイオスはラテラーノを出てからどういう
人達に会って来たんだい？」

「俺か？俺はな——」

そう言いながら暫く会話を続けていたら。いつの間にか寝落ちし
てしまっていた。

起きたのはモステイマの方が早かったようで先にチェックアウト
の準備を済ませていた。

おはよう。と言うと向こうも同じように返してはくれたが先に下
に行っているとき少し足早に出て行ってしまった。

∴顔、赤かったな。

そういう俺自身も昨日そのまま添い寝しながら寝落ちしてしまっ
たのを思い出して顔が熱くなったのであった。

くシラクーザ・郊外く

「うん、これで準備完了かな」

「燃料は大丈夫なのか？」

「仮に向こうに着くまでに切れても予備の燃料缶があるから大丈夫さ」

ホテルを出た俺達は郊外の空き地で解散する事にした。

「じゃあなモステイマ。運が良ければ……いや違うか、また今度会おう。」

「フフツ……いい旅をケイオス。また会おう」

その言葉を交わして俺は踵を返す、が

「ケイオス！」

「お？な……んっ!？」

モステイマに呼ばれ振り返ると、キスをされた。

「……昨日お返しさ、またね」

そうモステイマは言うのとトラックに乗り込み、思考停止してる俺を置いて出発して行った。

「……………あ、あんの野郎!!」

熱くなつた顔を手でパタパタと扇ぐ……不意打ちをくらうとは……!

「ふう……ま、中々どころか。とんでもなく濃い時間だったな……」

そう言いながら空き地の隅に鎮座しているキラードロイドに掛けていた大きな布を取っ払う。

『グウ?』

「じゃあ俺達も行くか!次の場所に!」

キラードロイドに跨がり、俺達は歩き始めた。

さあ、次は何処へ行こうかな

間話

EX—1 監督官の杞憂／酒場の思い出話1

「ふう、次は何処に行くんだったかな。」

ケイオスと別れ、龍門に戻って来た私は書類を元の送り主に返しに行った後、龍門にあるバーで次の仕事のスケジュールを確認していた。

そしてそんな私の前にシラクーザでは姿を現さなかった『監督官』さんが私の隣に座ってきた。

「隣、座るわよ。」

「構わないとも、君と話すのは一ヶ月ぶりくらいかな？」

「……ええ、そうね。本当ならシラクーザで接触しようと思っていたけれどまさか貴方が奴と行動しているとは想定外にも程があったわ。」

「奴…ってというのはケイオスの事かな？」

「ええ、むしろそれ以外当てはまる人物がいるわけないでしょ？奴は公証人役場のほぼ全ての執行人を返り討ちにした挙句、その執行人達の守護銃を奪った。上層部は完全にお手上げ状態で監督官は奴に接触する事は禁止とされる程の最重要警戒人物なんだから。」

私は少し驚いた。彼が執行人を返り討ちにしているというのは知っていたけれど監督官まで寄せ付けないというのは今初めて知ったからだ。

でもまあ…

「彼らしいね。」

「…随分知ったような感じね。シラクーザで接触して墮天使同士、息でもあったの？」

「あれ？前に私話してなかったっけ？ケイオスと私は元々友人だよ？」

私がそういうと彼女の顔がピシツという音が聞こえそうなくらいに固まり、数秒後に口を金魚のように口をパクパクさせてきた。

「な、なな…:どういう事!? 貴方と奴が友人同士!!? 聞いたことないわよ!!」

「んー、まあ友人でもあるけど一応先輩後輩っていう関係でもあるかな、色んな意味で」

「ハア…:聞くだけで頭が痛くなるわ…:正直貴方達がシラクーザで接触したのを知った時はどうなることかと思つてたけどただの杞憂だったわね。」

「おや、心配してくれてたのかい?」

「別に…:奴がらみで、しかも貴方に何かあったらとんでもない面倒事を招きかねないしね。」

そう言つてまた彼女は溜め息を吐いた。

だいぶラテラーノはケイオスに対して参つてしている状態なのかなつと考える。…:結局私はラテラーノを出て行った後のケイオスの事をあまり知らない。もつとあの時いっぱい聞けば良かったかな…:柄にもなく…:いや、ついついケイオスに会えたのが嬉しくて、離れたくなくて…:それで…:一緒に……………

「ちよつと? 貴方顔が赤くなつてるけど大丈夫?」

「えつ…:あ、ああ、うん。私は大丈夫だよ…:だけどちよつとだけ今日は飲みすぎちゃったかも。」

私は彼女に高揚した顔を隠すように少し足早に代金を支払つてバーから出て行つた。

「え、ちよ待ちなさいよ!? まだ話は……………」

彼女…:監督者はモステイマに声を掛けるがそれは届かなかつた。

一人バーに残された彼女は呆気に取られる。

「…:本当に飲みすぎたの…:いやでもあいつはそんな……………:まさか」

別の考えが浮かんだ監督官だが直後に首を横に振つた。

「いや…:あいつに限つてそんなこと…:ない、わよね…:?」

彼女の予想は答えに最も近かったがそれに答えられる者はもうこの場にはいなかった。

―監督者の杞憂―END―

この日私は、休暇で龍門のバーをはしごして周っていた。とはいっても単に趣味の為だけでは無く、バーに行けば様々な情報を得られるからだ。

酔っ払う会社員、コソコソと何かしらについて話すマフィアと思われるループス族、飲みすぎて仕事内容を話してしまう近衛局員と思われる人物。等いつもの光景ではあるがそこから溢れる貴重な情報やスクープがあるのだ。

だがこの日はとても幸運な日だった。
なぜなら

「貴方は…あの時の…」

「……………うあ、もしかして君は…」

あの日に別れた彼と再び会うことができたのだから。

「いやあ久しぶりだな！あの辺境にあつたバーで別れた時以来かな？あの後特に何もなかったようで安心したよ」

「はは…まああの後は特に何もありませんでしたが…貴方は何故ここに？」

「ん？ああ…まあ単に立ち寄っただけだよ。龍門のバーは良い所が多いからな、たまに一緒に飲む飲み仲間と会えれば良かったんだがね…一人はともかく残りの二人は忙しそうだからなあ…」

「その飲み仲間の方々はどんな人達なんですか？」

「お、聞くねえ。ああと、確か全員女なんだが他二人はちよつと苦労人的な感じの立場…あー、と…そうだ、確か龍門近衛局で仕事している奴らなんだがもう一人はとんでもない奴でなあ…そいつとは旅をしている時に極東辺りで会つたんだが…向こうも流浪人つて言うのかな？まあ旅人みたいなもんでいきなり酒飲み勝負を仕掛けてきた挙句その後何故かサッカーをする事になってな…まあ最近は会つてないから向こうがどうしているかは分からないがその初めて会つた夜はまあ衝撃的というか疲れる日だったよ。」

と、彼はその時の事を思い出し、若干疲れた様な顔をして項垂れるように話す。彼自身といい彼の周りの関係はその見た目とは裏腹にとんでもなく広く複雑なのかもしれない

「な、なんだか想像するだけでも大変そうな話ですね。」

「だろう？悪い奴ではないんがな…まあ、その四人で集まって飲んだ事なんて片手で数えるぐらいしかないけどな！」

「その極東の流浪人の方以外…つまり近衛局に勤めている方々とは結

構飲んでいたりはするんですか？」

「まあ、龍門に来た時に会ったらそのままバーやら酒場に引きずられてよく仕事の愚痴を聞かされたりしてるよ。これも別に嫌ではないから良いんだけどな、あいつら酔う前と酔った後のギャップが面白いからさ。」

さつきとは変わって彼はケラケラと笑うように話す。まあ、先述した極東人とは仲が悪いわけではないのだろう。そういえば…

「確かキラードロイド…という名前でしたよね？あの怪物は今何処に…？」

「ああ、あいつなら今は、いや今回はスラム街に停めてあるよ。ここの近くに駐車場とかが無かったからな…」

「スラム街…ですか。あの辺りは龍門内でもかなり治安が悪い筈ですが大丈夫でしょうか…？」

「んー？大丈夫とは思うけどなあ…スラム街の人達とはまあまあ仲良い筈だし…まあ見つかっても子供達の遊具になるだけだから問題ないでしょ」

「大アリだと思うんですが…」

私は驚愕した。龍門のスラム街はかなり治安が悪く、記者達もとうか殆どの者は近づかない場所だからだ。だが彼はそんな所にもまるで繁華街を歩く様な感覚で入り、さらにその住民達とある程度友好関係を築けていると言うのだから…あの怪物が遊具扱いされている事も充分驚きだが。

そんな私の内心を知らんとばかりに彼は話を続けた。

「でも確かに最近はこちらと怪しいかもねえ、なんだかちよつと前より物騒というか揉め事が多いみたいなんだよね…スラム街。まあこの世の中自体元々物騒だけど。」

彼は酒をちよびちよびと飲みながらそう言った。

…彼は最近の情勢を知っているのだろうか…？

失礼とは思いつつ私は聞いてみる事にした。

「しかし最近はこちらに物騒になってきているらしいですよ。感染者の集団が偶発的に事件を起こしているらしいと私の同僚達の間でも少

し話題になっていて…」

「感染者の集団…？あ、あれか、何て名前だったかな…確か、えーつと…そう！レヴナント・ムーンライト！」

そう思い出したように意気揚々と答えた彼に私は苦笑いした。

「レユニオン・ムーブメントですよ…どうやったらそんなキラキラネーム出てくるんです？」

「すまんすまん…あんま関わりがない組織は覚え難くてな…」

そう言いながら彼は照れ隠しのようにグビツと酒を飲み干す。このバーの酒は美味いな、覚えておこうと彼は言った。

ここで私は彼が感染者についてどう思っているのか気になったので意を決して聞いてみる事にした。

「感染者といえば…貴方は感染者の事をどう思ってるんですか？」

と、聞くと彼は少し驚きながら

「おー、随分と重い感じの話題を振ってくるね」

「こんな世の中ですし…職業柄気になってしまいました。」

「ハハハ、まあ君とまた出会えた事だし…そういう話題でも全然構わんよ。」

彼はバーのマスターに追加の酒を注いでもらいながら答えた。

「そうだな…俺からすれば感染者は特に険悪するような感じでは無いな、別に感染者とずっと近くにいたらといって自分も鉱石病になる訳じゃないだろう？まあ今すぐにでも死にそうって感じなら申し訳ないが、離れて欲しいけどな。」

険悪したりはしないが罹りたくはないからな。と彼は最後に言って、新しく注がれた酒を飲む。

私はさらに気になったことを聞いてみる事にした。

「成る程…ではやはり旅をしている間にも私と話すように感染者と話す事はあつたんですか？」

「ああ、君とこうして座りながら話すように色々なやつと話したもんだよ。龍門のスラム街の子供達、クルビアの辺境で生活してるおっさん、他にも色々な場所、国とかだな。1番最近だと…そうだな、イエラグのカランド山であつた娘かな。いやー、あの時は大変だったよ…」

二度目のカランド山登頂だったんだが雪崩に巻き込まれかけてね。俺は避けれたんだが、その娘は巻き込まれちゃったみたいでさ、しかも脚に源石が刺さっちゃって…苦勞したもんだよ。」

「ええっ、その後はどうなったんですか!？」

「そりゃ、その娘を背負って山を降りたよ。まあでかい雪崩だったからね、麓に着いたら結構人がいたから引き渡したよ…まあその後は…:…:…うん、すまん。話したいけどそろそろ時間だ。」

彼は話を続けようとしたが店の時計を見てそう言った。当然話の続きが気になる私は彼の言う時間の事を聞いた。

「時間、とは？」

「ああ、実は次はウルサスに行こうと思っててな、今、龍門の近くにある移動都市がウルサスのチエルノボーグ市らしいからここで少し酒を飲んで暇潰しをしたんだ。君が来るのは予想外だったけどな。」

「ウルサス…ですか。あそこは確か感染者への迫害が強く、かなり暴力的な国家と言われていますが…」

「まあ確かにあそこは感染者の迫害がかなり酷いし、戦争大好きというかかなり血気お盛んな国だが街の情景や郷土料理は美味いからな。まあまあお気に入りなのだよ、感染者関連以外はね。しかし何があの国の感染者への異常な差別というか恐怖心みたいのを掻き立ててるのかねえ…」

彼は目を細めながらそう呟くと、テーブルに金を置いて席を立った。

「あ、お代は私が…」

「いや、話し相手になってくれたからな。その礼だ…それではな運が良ければまた会おう！」

私に有無を言わせる間もなくそう言って彼は店から出て行ってしまった。

相変わらず彼は不思議な人だ…少なくとも彼の生き方は少しばかり羨ましいものがある。

…あつ、そういえば彼の名前をまだ聞いていなかった。これだけ話

をしていたのに肝心な事を忘れてしまっていたとは…彼とまた会えるといいが…

そう思い、私も店を後にした。しかし彼が向かったウルサスであるな大事件が起こるとは私も彼も予想することはできなかつた…

―酒場の思い出話―E N D―

EX—2 バンデットという傭兵

——黒い天使が現れた時、敵対する全ての命を刈り取っていく。その大地を死体と血に染めて……

地面を割れば炎が吹き出し、背中の結晶の羽根からは光が降り注ぎ、得物の大鎌を振るえば黒い竜巻があらゆる物を吹き飛ばした。

奴に抵抗した者は皆等しく殺された。戦場に現れた死神のような天使を誰一人止める事は出来なかった。

そして全てを奪った後、元々その場にいなかったかのように去る。誰一人その黒い鎧に隠れた素顔を知る者はいない。

分かっているのはサンクタ族という事とその傭兵のコードネームのみ。その名は——

バンデット。

「バンデットの噂か…久々に聞いたな。」

「傭兵時代に宿舎で聞いた話だ、私は遭遇した事はない…というより教官は知っていたのか?」

「私がボリバルにいた時にも軍内部でよく噂になっていたので知らないさ」

ロドス艦内のオペレーター休憩室にてドーベルマン、メテオリーテ、フロストリーフは近々行われるある作戦の事について話していた。そこで出てきた傭兵関連の話から現在のバンデットという傭兵の話がフロストリーフから持ち出されたのである。

「…メテオリーテ?」

「あ…ごめんね。まさかのその話題が出るとは思ってたからつ

い奴と遭遇した時の事を思い出してしまっていたわ。」

「待て、今なんて言った？ 奴に…バンデットと戦ったことがあるのか！？」

メテオリーテがサラツと言った発言に思わず二人は驚愕し、詰め寄った。

「ちよ、ちよっと！ 近いわよ！…まあ私も同じようにロドスに入る前の傭兵時代の時の話だけど…聞く？」

「当たり前だ。」

「バンデットは1番情報が少ない傭兵と言われている。直接戦ったという生き証人がいるだけ貴重な物だ、宜しく頼む。」

フロストリーフとドーベルマンはそう言った後、姿勢を正し、話を聞く態勢に入った。

「分かったわ…あれは——」

その日、私達傭兵が受けた依頼の内容は大規模な密輸密猟団の襲撃だった。とはいっても依頼側の戦力が万一削れた場合に投入される予備兵力のような扱いだっただが…今思えば依頼側の戦力と統合され、最初から襲撃に参加していたら私は今ここにはいなかっただろう…

私達が現場に到着した時、辺りは惨状と言うにふさわしい状態だった…

上半身と下半身がバラバラになっている死体。首が無い死体。身体が原型を留めていない死体に、心臓を的確に射抜かれている死体等

…50人もいた筈の部隊は無惨にも壊滅していた。

「馬鹿な…こんなことが…」

「全て死体だというのか…」

「一体あの通信の後何が…？」

一緒に来た同業者が唾然としながらそう言い溢した。

「分からない…ただこの惨状を作った奴はまだ近くにいる筈よ、警戒して」

そう他の傭兵達に言いながらも彼らが唾然とする理由も私には分かる。ここに斃れている連中は軍の新兵などでは無く、大半が戦闘経歴が長いベテラン揃いだったからだ。そのベテラン揃いの傭兵部隊が大規模とはいえたかが密輸密猟者の団体に返り討ちにされるなんて私含めだれも想像することはできなかつただろう。

「我々は向こうの地点を搜索する。メテオリーテ、お前は我々をすぐに援護できる狙撃地点を確保しろ。」

「ええ、わかつたわ。」

そう言葉を交わし、彼らと別れた私は天井が剥き出しになっている廃ビルに陣を取った。

そして彼らの動向をハンドバリスタに付いているスコープで覗いた瞬間、轟音と土煙と共に彼らの前に黒い鎧が姿を現した。

そいつは真っ黒に血のような赤が混じった全身装甲を纏い、赤く光る刀身の大鎌を肩に掛けていた。そして頭に浮かぶ光輪と背後に浮かぶ結晶のような羽…間違いなくサンクタだった…けどその姿はまるで…

「死神…」

『うわああああ!!』

「っ!!」

呆けてしまったのも束の間、一瞬にして一人、奴の大鎌によって斬り飛ばされてしまった。

私はすぐ様、奴に標準を定めハンドバリスタの引き金を引いた。

放たれた榴弾矢は真っ直ぐに奴へ向かっていき命

——する事はなかった。

「嘘…でしょ…!?!」

思わずそう言わずにはいられなかった。

奴はあり得ない事に放った矢を自分に命中する寸の所で矢のシャフト部分を掴みその手でへし折った。

完璧なタイミング、そしてこちらの位置もバレていない状態での狙撃。

それを奴は矢が飛んできた方角を瞬時に察知したどころかハンドバリスタで放った矢を掴むという人間離れした業をこの一瞬で見せたのだ。そして……

『』

『た、すけて…』

『逃げ、ろ…コイツは化けも…』

私が唾然としてしまっている間に共に行動してきた前衛の傭兵達が全滅してしまった。

っ！何を呆けているのよ私は！

相手はもう既にこちらの位置を把握してしまったている可能性が高い。

そう考えた私はハンドバリスタを担ぎ、今いる廃ビルから移動しようとした、が

ドゴオン！

「ッ!!」

奴は空から先程と同じように地面に轟音を響かせ私の目の前へと降りてきた。

「…随分と派手な登場ね。」

私はそうを言いながらも威嚇する。だけど奴はそんな言葉に対して淡々と言い放った。

「…………お前で28人目…恐れるな、死ぬ時間が来たただけだ。」

奴は大鎌を肩にかけたまま、私はハンドバリスタを構えたまま動かなかった。

ハンドバリスタは高威力だが連続して撃つことができない。奴は

間違はなくそれを分かっている、先に私の攻撃を避け、反撃手段を失った状態の私を仕留める気だったのだろう。

お互いに睨み合いが続いた……………そして遂に動き始めたのは奴だった。

「……………!!」

「くっ…!」

奴が大鎌を構えた瞬間、私はバックステップで後ろに跳んだ。そして奴が飛び込んできた瞬間ハンドバリスタ引き金を引いた!

至近距離で放たれた散弾矢が奴の眼前に迫る。前傾姿勢の奴は如何に速く腕を動かそうと確実に間に合わない距離。確実に矢は奴の顔を捉えた!

そう確信した瞬間、奴の姿がブレた。

「(えっ…?) …か、はっ!!」

ブレた奴の姿をみて困惑したその一瞬、突然背部から強い衝撃を受け吹き飛ばされた。

私は突然の衝撃を受け止めきれず地面をバウンドしながら転がり壁に激突した。

「つぐ…(一体、何が…)!?」

痛みに耐えながら顔を上げた先には無傷の奴が大鎌を構えて立っていた。しかし先程とは違い、鎧の兜部分にある。二つの眼が薄っすらと赤く光っていた。

「……………終わりだな。」

奴は大鎌を振りかぶる。ハンドバリスタは手放してしまい。身体も動かない…

私はとうとう諦めて目を瞑ってしまった。

そして私に大鎌が振り降ろされ

ピピッピピッ。

「えっ?」

ピピッピピッピピッピッ、ピー

そんな時、戦場で鳴るような音ではない音が聞こえた。それはまるで朝起きる為のアラーム音のような…

私は幻聴かと思い恐る恐る目を開けた。

そこには既に私に背を向けて歩いていく奴の姿があった。

呆気にとられて私に向かっている奴は顔だけ振り向かせよう言った。

「依頼達成…タダ働きはしない。運が良かったな、サルカズの人。」

そう言って奴は瞬く間に私の前から姿を消した。

「これが奴…バンデットとの最初で最後の戦闘よ」

「…よく生き残れたな」

「奴が言った通り本当に運が良かっただけよ。アラムが鳴っていなかったら今頃ここにはいないわよ。」

語り終えたメテオリーテはフロストリーフに苦笑いを含みながらそう言った。

そこでドーベルマンが思い出したかのように言った。

「そういえば…このバンデットにまつわる話はロドスの要警戒人物リストにも載っているのか？」

「ああ、前に私がアーミヤの書類仕事を手伝った時に伝えておいた。奴は活動時期や所属勢力が不明だからこそ何処にでも現れると言えらるからな…ドクターの救出作戦にも敵対勢力側に雇われている可能性は十分あると思う。」

「そうか…改めてアーミヤとバンデットの危険性と作戦への懸念を話さなければならぬな。二人とも情報提供感謝する。」

「気にするな」

「力になれて何よりよ」

そう言っただーベルマンはさっそくアーミヤと作戦の再調整をする為か、休憩室から足早に出て行った。

チエルノボーグ、ドクター救出作戦の開始はもうすぐそこまで迫ってきている。

くウルサス・チエルノボーグ郊外く

「べあつくしよい!？」

『グオ…?』

「あ”あ”…ズズツ、久々にめちやくちやデカいくしやみをしたな。誰か俺の噂でもしてるのか…? いやそれはないか、目立つような事した覚えはないしな…」

黒く燻んだ羽と頭に輪と片折れの角を持つサンクタの男は一人そう呟くと、再び武器の手入れ作業に戻ったのであった。

ーバンデットという傭兵ーENDー

チエルノボーグ編

2—1 嵐の前の静けさ

龍門の移動都市から降り、しばらくして停泊していたウルサスのチエルノボーグの移動都市に着いた俺は珍しく2日程この都市に留まっていた。

特に知り合いがいるとか、何か巻き込まれたというわけでもなく単純に観光やウルサス料理を堪能していた為だと思われる。

ちなみに今何をしているかというと：

「…近づくな。」

「う、ううっ…」

俺は腕を怪我している感染者の少年とそれを庇うように殺意を向けてくる白いコータス族の感染者の女性と対峙していた。

…状況を整理しよう。

今日の朝食を済ませた俺は街を散策してうちに裏路地に入り、たまに襲いかかってくるチンピラを張り倒したり。ここに住み返しているのかめちやくちや威嚇してきた凶暴な野犬を逆に威嚇し返したりしながらも歩いてきた。そして角を曲がったら。腕が血塗れな少年と俺の姿を見るなり警戒心爆上げさせた白いコータス族の女と出会ったのだ。

「……………」

「……………」

俺と白いコータスの女は見つめ合う…というよりは向こうに一方的に睨まれているだけなのだが。動かない。

…このままじゃ埒があかない、少年はうめき声を上げるだけでおそらく意識は朦朧げ…しかも野犬に噛まれているから菌の事も心配だ。

恐らくこの女は俺より先にこの少年を見つけたが医療道具を持っていなかったのだろう。

だから寄り添うぐらいしかできない…あ、そうだ。

俺は今着ているコートの懐に手を入れる。が、その瞬間向こうの殺気が高まる。

「おい、殺気を向けるな。その子を殺す気か？」

「…ならば今すぐここから去れ」

「お断りする。貴方は感染者だから他人対する警戒心がかなり強かったり、心に壁とかがあるのは分かるが…貴方はともかくその怪我をしている子は見過ごしてはおけない。俺は感染者、非感染者であるとかは特に気にしないしどうだって良いんでね。」

そういいながら、俺は懐から出した市販の消毒液、ガーゼ、包帯を地面に置き、両手を上げて揉め合うつもりは無いという意味を見せながら一歩下がった。

これで応急処置にはなるだろう。

「これは…」

「使え、市販品だが応急処置には十分だろう。…俺が非感染者だから疑うのも無理はない。だがいつまで経っても睨み合いを続けてたらその子が死ぬ、俺を近づけさせないならせめてお前がそれを使って処

置しろ。できるだろう？」

「…分かった。」

そう言うのと医療品一式を手に取り、少年の処置を始めた。

よし…あとは病院、といきたいがここはウルサスだからなあ…100%突っぱねられるだろうし…どつか良いところは……あ、そうだ！これなら…

そう考えに耽っていると。

「おい…おい！」

「ん？ああすまない。どうした？」

「…終わったぞ」

「ああ、そうか。良かった…」

そういうと女はスツと、こちらに応急処置セットを渡し、気まずそうに言った。

「その…すまない、疑ってしまつて。」

「え？ああ、まあ気にしなくても…他はともかくここはウルサスだからねえ…警戒するのも仕方ないから…というか、君コータス族だよね？さっきの様子と態度見るに感染者だと思うけどなんで態々こんな差別が他国と比べてどぎつい所に来たんか？」

「…それは」

女が言葉に詰まっていると、走ってくる音が聞こえる。…前の方か。

視線を向けると白いフードに顔を隠した二人組がこちらに向かって走ってきていた。

「おーい！姐さーん！」

「医療器具を持ってきました…って誰だお前!？」

「いや、こっちの台詞だわ。何この白フードの男達は…君の友達？」

「私の…兄弟達だ」

そう、サラツと女は言った。

なんだ…身内か、てつきりやばい宗教の人だと思った。見た目的に。

まあそれは置いておくとして…

「そうか…まあそつちの質問とか話は歩きながら話さないかい？この近くには確か闇病院があつた筈からこの子をそこに連れて行く。」

「アザゼルか？」

「そういう名前なのか？前にここに来た時にチラツと見た程度だから名前は知らなかつたな。」

そう言葉を交わして、俺達は歩き始めた。

ああ、そういえば。

「そういえば、自己紹介がまだだつたな。俺はケイオス…旅人だ。そちらは？」

「私は…」

女は少し迷つた後、こう名乗つた。

「私の名はエレーナ、ただの感染者だ。」

俺は白フードの男達とエレーナと共に怪我を負っていた少年をアザゼルに引き渡した後、再び裏路地で少し会話を弾ませていた。

本当はアザゼルに引き渡した後別れようと思つたのだが…

少年を運んでいる間に話した旅話の事がこの白いフードの男達は気に入ってもらえたらしい。エレーナも少なからず興味を持っていた。

「あとは…というか今更なんだがエレーナ、お前の近くにいると随分冷えるが…鉱石病の進行具合が酷いのか？」

「…ああ、まあ私達にも色々あつてな…特に、味覚等も感じなくなつてしまった。」

エレーナは懐から出した包紙に入っているキャンディを手のひらで転がしながらそう言った。

「姐さん…」

「そうか…鉱石病は謎が多いしな…あいや待てよ？寒さとか冷たさは現状どうにもならんが味覚なら……これ。」

俺は常備しているポーチから一つ棒付きキャンディを取り出す。

「赤いキャンディ…？」

「赤いな、いちご味ってヤツか？」

エレーナと白フード一号がそう聞いてくる。

俺は基本的に甘い飴しか食べないが…眠気覚まし用や旅先で誰かと遊んだ時、飲み席とかの罰ゲームに使っている飴がある。それは…

「残念だがどれも不正解だ！正解はクルビアにあるキャンディショップで偶に出回る飴。その名もハバネロキング味だ！こいつは食べたら最後、ハバネロチップスの何十倍の辛さを持ち、口から火を噴くどころか火炎放射が出そうなくらいには辛い。寒冷地で食べたら丸一日身体が燃え盛っているじゃないかって程熱くなる…が、最初に言った通り口の中は大惨事になる飴だ。」

「おい待て、そんなものを姐さんに食べさせる気か!？」

「やらせないぞ!!」

「良いじゃないか、味覚が大分薄れてしまってるなら意外にちょうど良いかもしれないだろ？」

「…確かに、一理ある…か？」

「姐さん!？」

「隙あり!」

「んぐっ!？」

白フード達が動揺した隙に少し口が空いていたエレーナの口にキャンディを突っ込んでやった。

「ああああ!?!しまった!?!」

「姐さん！早く吐き出すんだ!」

「ん………、っく!?!」

キャンディを舐めていたエレーナの顔が驚きに染まっていくなを見て、思わず俺は笑ってしまう。

「ハッハッハ！良い表情だな！やっぱり誰彼関係無しに驚いたり笑ったりしている表情が一番良いな。」

「とてもピリピリする…昔食べたキャンディとはかけ離れた味だ…」

「そりゃ辛いからな…お前ら二人も食うか？」

「え、いや俺達h「遠慮するなって！」むぐっ?!」

今度もエレーナの時と同じように俺は白フード達の口がありそうな部分にキャンディを突っ込んだ。

「あっ」

と、エレーナが声を溢すが時すでに遅し。

「ぎゃあああああああ!!水！水う!!」

「口があああ！口の中がああああああああ!!」

あまりの辛さに口を押さえながら地面を転げ回る二人。

「ハハッ！そんなw転げ回る程だったのかwヒッヒッヒッ…」

「プ、フツ…」

その様子が見て俺は大笑いし、エレーナは笑いを堪えていた。

ゴーンゴーンゴーン…

そんな内に昼の時間を告げる鐘が街全体に鳴り響く。

…ちようど良い時間だな。

「もう昼か…楽しかったが解散とするかな。それではな三人とも、運が良ければまた会おう！」

「…ああ、会えると良いな、また」

そう言つて含み笑いを浮かべたエレーナは未だ辛さに悶えている二人を立て去っていく。が、一度立ち止まりこちらを振り向き、こう言った。

「…お前はここにいつまでいる気なんだ？」

「?どういう意味だ、まあ…結構堪能はしたし明日の夜明け前ぐらいにはここを出るつもりだが」

「…そうか。…良かった」

「ん?なんだ？」

「いや、何でもない。…さらばだ」

エレーナはそう言うと、今度こそ去っていった。

…明日何かあんのか？？それに一瞬なんか表情が和らいでいた気がするが…：まあ、良いか。

さて、今日は何処で食べようかな。

昼食を何処で食べようか考えながら俺は大通りへと足を進めた。

…この後の大事件に巻き込まれる事になるとは微塵も考えずに。

～翌朝～

俺は移動都市を降り、水平線が続く荒野：ではなくチエルノボーグの道沿いにあるカフェにいた。ちなみに夜明けはとっくに過ぎ、空は明るくなってきている…：といつても曇りだが。

そして俺が今だここに居残っている原因の人物は呑気に目の前の席に座りながら朝のコーヒーブレイクを味わっている。

「ハア～…」

「溜め息をつくときせが逃げるよ。ケイオス」

「お前が原因だよモステイマ…」

ホテルを出て、キラードロイドを置いてある場所まで向かおうとしたら突然目の前に見覚えのあるトラックが止まったと思えば、コイツが出てきたわけだ。そしてそのまま流れるようにカフェに入って、今こうして話している…：

どうしてこうなった？

「モステイマ：確かに前、一ヶ月に一度会うとは約束したが…最後にあったのは確か一週間前のリターニア王国だったよな？しかもリ

ターニアでまた会う3日前はカジミエーシユの遺跡で：いくらなんでも多すぎるだろう。」

「私は君に会えて嬉しいよ？それとも：ケイオスはあまり私とは会いたくない、のかな？」

少し困り眉な表情でそう言い返してくるモステイマ。

「俺がお前に会いたくないわけないだろう？だがいくら何でも出来過ぎてるんじゃないかって話だ。まさか秘密裏に情報屋なんか雇っていたりするんじゃないだろうな？」

「まさか、全部偶然さ。むしろ情報屋程度で君の位置が知れるなら頼みたいくらいだよ。」

「しれっとストーカー発言をするんじゃない！全く：もしかしてシラクーザの時に言った言葉、実は諦めきつてないのか？」

「……どうかな。」

モステイマは少し微笑みながらそう言った。

「（絶対諦めてないなコイツ：まあ、会えるのは実際悪い気はしないし良いけどな…）」

そんな事を頭の中で浮かべていると思いついたかのようにモステイマが言った。

「そういえばケイオス、君はどうしてここに？」

「ん？ああ、数日前に龍門にいてな、丁度ここが近かったから来たんだよ、久々にな。」

「成る程ね。」

そこからはお互いにコーヒーを飲みながら最近の事を話したり、旅の話をしたりとしばらく談笑を続けていた。

そして場所を移そうと、会計をして店を出た瞬間。

突然、遠くで悲鳴と爆発音が鳴り響いた。

「なんだ？火事か？」

「…いや、違うと思う。これは…」

モステイマが何か言う前にまた次々と遠くで爆発音が鳴り響く。

ああ、確かに火事なんかじゃなさそうだ。

これは…

「感染者だ！感染者達の暴動だ！」
爆発音があった方向から走ってきた憲兵がそう叫んだ。

後にいうチエルノボーグ事変が市民の悲鳴と鳴り響く轟音と硝煙
と共に今、始まった。